組香の情景　–『香道蘭之園』考

岩﨑 陽子
（同志社大学）

抄録–元和・寛永期の香道隆盛を経て、香の伝書『香道蘭之園』は「古法」、「古実」として組香200余種を精選し採録した。本論ではいかなるテーマが好まれ、正統な組香として採用されたかを組香の主題の分析を通じて考察する。主題を花鳥風月、また京都の伝統行事、源氏物語などの古典文学等に分類し、その傾向を分析する。また香文化が上方から江戸へと移る転換期に、人々の中に組香がいかなる情景を結んだかを明らかにする。

[Summary]

Imageries shared through the Japanese traditional art of incense

IWASAKI, Yoko
Doshisha University

Kodo-Ran-no-Sono is a text written after the 17th century on *Kodo*, the Japanese art of incense, during the height of its popularity. It presents more than 200 kinds of *Kumi-Kos*, which can be considered a game of incense, as well as their traditional forms.

The aim of this paper is to examine the criteria of selection in traditional *Kumi-Kos* through the analysis of themes appearing in the original text. In order to identify their central motifs, the themes are classified into the categories: beauty of nature, traditional events of Kyoto, and classical literature, such as *The Tale of Genji.*

This paper concludes that the imageries shared throughout the text was greatly influenced by the Kuge court culture of Kyoto, and this left a mark in the standard of selection presented in the text despite the historical fact that the capital was moved from Kyoto to Tokyo around this time.

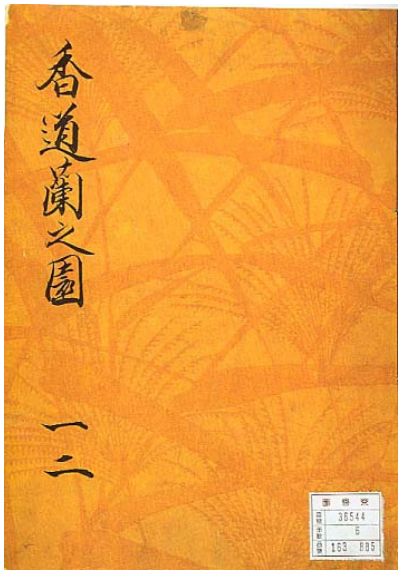
0　はじめに

「組香」とは香道における香遊びの一種である。通常、香道は一連の所作と共に参会者が香木を順に聞いて（聞香）これを賞玩するものであるが、組香の形式をとるとこれに競技の要素が加わる。例えば、有名な組香である「源氏香」では五つの香を順に聞き、その異同を源氏物語の帖名にあてはめた図式に変換し[1]、参会者各々が「空蝉」や「若紫」というように回答することによって当否を競い、会席で源氏物語の情景を共有することができる。つまり組香は、本来あいまいで比較が難しい香りを、香の席でテーマを設定して共有できる言葉にし、イメージに置き換えること、いわば「香りの情景化」ともいうべき機能を果たすと考えられる。組香のテーマには花鳥風月、和歌、物語、漢籍、季節ごとの伝統行事といった様々なものがある。したがってこうしたテーマを分類・分析することによって、当時の文化人たちによってどのようなイメージが共有され得たかが読み取れるはずである。また香りを言葉に置き換えた想像力によるイメージの共有だけではなく、イメージをより具体的に共に楽しむという方法もでてくる。この「盤物」と呼ばれる組香の場合、盤の上に人形や動植物の模型をコマとして進めるなど、組香の主題に視覚的要素が加わる。このような香を使った洗練された遊戯は他国に類を見ず、わが国独特の香りの文化だといえよう。組香の歴史は15世紀後半の室町時代にまで遡るが、江戸寛永期にはすでに200種もの組香が考案され流布しており、現代ではその数700種に上ると言われている。

本論の目的は江戸中期の香書『香道蘭之園』をとりあげ、主題の傾向性によって当時の文化状況や嗜好性を読み解くことにある。その方法として、本著に掲載されている組香の主題を古典文学、名所、伝統行事などに分類・分析する。

この書に注目する理由は第一に、本書が古法の香道の集成として当時から現代に至るまで「香道書の代表」[2]と認知されてきたからである。元和・寛永期に後水尾天皇と東福門院和子周辺で華麗な組香が多く創作され、香道は隆盛をみた。後に巷に氾濫していた組香の中で『香道蘭之園』は200余種の組香を精選、掲載している。この組香掲載数は他の香書と比べてずば抜けて多く、選ばれた組香は古実・古法を守った当時の正統なものであると評価されてきた。そこで当時の200余種の組香の精選基準、つまり「古実」、「古法」の内実について検証を行いたい。

また第二にこの書が位置する時代背景にも注目したい。『香道蘭之園』の成立時、他の諸文化とともに香道もまた



（図１）『香道蘭之園』
御所本一・二巻表紙
尾花模様鬱金捺染

[1] この図は「源氏香之図」と呼ばれ、江戸期のすぐれたデザインとして着物の柄や菓子の図柄などの多方面に取り入れられ、現在でも意匠として使用されている。拙論を参照。岩﨑陽子「香りと記号–源氏香之図をめぐって–」、『デザイン理論』49号、3-15頁、2006年。

[2] 神保、2003、160頁

京都から江戸に伝播しつつあった。『香道蘭之園』を伝授した鈴鹿周斎、上方から江戸にわたって香道普及に努めた人である。したがって先の精選基準に関しても、本書における香道や組香の正統性を根拠づけるような主題が選択された可能性が高い。そのオーソリティを抽出することで、香文化が上方から江戸へと移る転換期に、人々の中で組香の情景がどのような像を結んでいたかを分析する。また対照的視点として享保期に上方にあり、多くの香道の版本を流布させた大枝流芳もとりあげる。最後に組香に現れる情景に果たした盤物の役割についても触れる。『香道蘭之園』に掲載されている組香のほとんどは現在存在しないか、内容を一部異にしており、これを分類・分析することは香道史のみならず、当時の文化的状況の把握にも有益であると考えられる。

1　鈴鹿周斎『香道蘭之園』、そして大枝流芳『香道秋之光』『香道千代之秋』について

延宝五年（1677 年）から享保 18 年（1733 年）年間にわたって成立した『香道蘭之園』（国立国会図書館マイクロフィルム版[4]では「香道蘭乃園」）の書誌は以下の通り。26×18cm、10 巻附録 1 巻全 7 冊、写本。「香道蘭乃園」の書巻 1 - 5、8 - 10 の目録による。巻 6、7 の目録題は「香道蘭の圖」。各巻冒頭に目録あり。巻は香道の歴史、香の十徳、香席法度、香道具とその取扱い、道具飾り、香元手前から 7 巻は古法の組香、8、9 巻は源氏千種香、10 巻は香道具、名香目録、奥書等、附録には「新組香・組香異説」を収録。巻の奥書には「延宝五丁巳春自鈴鹿周斎授之/山下弘永/宝永七庚寅八月自弘永授之/栗本穏置/斯書原本一時之艸稿而前後錯雑/穏置患之菊岡房行加力精訂舊稿/始斯書大成名曰蘭園/享保十八壬丑八月上旬自穏置授斯/菊岡寄邦」「元文四己未九月下旬自寄邦授之/中村昌平/元文五庚申四月十一日自昌平授之/樺山久寛」「時元文四未秋向東窓菊岡崔下菴沾凉書之」とある。これを読み下すと次のようになるであろう。まず、延宝五年（1677 年）春、鈴鹿周斎から山下弘栄へ伝授され、宝永七年（1710 年）山下弘栄から栗本穏置へ伝授。栗本穏置は原本の錯綜を正すために門下の菊岡房行（沾凉）[5]に清書させ、享保18 年（1733 年）に菊岡寄邦（房行の兄）に授与、さら

---

[3] 鈴鹿周斎
–香道家　[生没]生没年未詳。正保–延宝（1644 - 81）頃の人。[名号]周斎と称す。[経歴]初め京都に住し、公家諸家の組香を伝授して香人として世に知られる。延宝初年（1673 - ）江戸に移り、同5 年、山下弘永に伝授。衣山宗秀と共に関東に香道を広めた。（『国書人名辞典』第二巻、岩波書店、1995 年、606 頁）

[4] 『香道蘭之園』には香道における伝授という形式から、版本ではなく書写本がいくつか現存しているのみであり、現在尾崎左永子氏によって宮内庁書陵部所蔵の御所本が翻刻されている（尾崎、2002、（図 1）参照）。これは他の高松宮家本といった宮家本と並んで書写体の格調が高く美麗であるとされる。筆者は尾崎氏の翻刻と対照するために国会図書本を入手し、本論では尾崎氏の翻刻と併用した。国会図書本は尾崎氏が指摘しているように字体・図ともにやや粗雑な感がある。（尾崎氏はその理由について、御所本や宮家本が献上本であるのに対して国会図書本が地下への伝授の際に短期間に書写されたものであることに由来するのではないかと推測している。前掲書、441 頁。）

[5] 菊岡房行

に元文四年寄邦から中村昌平へ、元文五年に昌平から樺山久寛に伝承されている。また元文四年に菊岡房行（沾涼）が書写したとなっている。こうした言から、鈴鹿が伝書を作成した後に菊岡沾涼がこれを精訂・完成するのに 60 年近い歳月を経ていることになり、この間に時代は寛永から元禄を経て享保に移っている。

さてこの伝書の目的について菊岡沾涼は一巻で次のように述べる。

> 「近代また香道流布あるにおゐて古銘をかりて新作せしめ、印本の異説あり。これらは信ずるにたらず。先の両師はあらたになせる組香をかたく制す。寛永の頃の組香二百余品あり、これに事のたらずと（いふ事なし。何ぞあらたになす事あらんや。また）近代の香道者、いにしへの志野流相阿弥流といふに准じて自流をたつる人多し。香道におゐてはあるべからず。先師、香の奥儀は極めたれども自分の流儀を立るにあらず。古法を師とするもの也。ただ古実を守るを以、香道の本意たるべしとの教なり。」
>
> （尾崎左永子『香道蘭之園』22 頁　下線筆者）

ここで菊岡は当時の香道関係出版物への不信を述べ、新作組香や新しい流派の創設などを激しく批判し戒め、先師・鈴鹿にならって「古法」「古実」の遵守を勧める。

菊岡沾涼の時代にあって新作組香を次々に創作しつつ香書を多く出版した人物、つまり菊岡の非難の矛先にあった人物は、おそらく大枝流芳であろう。大枝は自作の組香を掲載した版本を多く出版しているが、本論では菊岡の精訂期に出版時期が重なる『香道秋之光』『香道千代之秋』を取り上げる。

–（→「沾涼」の項に）
俳人　[生没]延宝 8 年（1680）生、延享4 年（1747）10 月 24 日没。68 歳。墓、江戸浅草誓願寺林宗院。[名号]初め飯束氏、のち菊岡氏。名、初め房行、のち光行。通称、藤右衛門・藤兵衛・利藤次。号、南仙人・崔下庵・沾涼（初世）・米山・南仙斎・独甫斎・活剣子。法号、米山翁沾涼居士・民竈院南仙沾涼士。[家系]飯束三悦の男。菊岡行尚の養子。[経歴]伊賀上野の人。江戸神田に住み、売薬（一説には経師）を業とした。のち柳川直光の門人となり、刀剣の装具などの金工を業として名を得た。俳諧は一晶・露沾に学び、点者となった。和漢の学に通じ、地誌や考証的な著作もある。二世沾涼は北村東巴が継いだ。[主な著作]江戸砂子（享保 17 刊）他。（『国書人名辞典』第三巻、岩波書店、1996 年。）

6　大枝流芳
–香道家　[生没]生年未詳、寛延 2 年（1749）- 同 4 年の間に没。[名号]本姓、大江。修姓、巌。号、流芳・四川・脩然翁・青湾・釣隠・漱芳。岩田信安と称。[経歴]摂津の人。香道を御家流の大口含翠保高に学び、皆伝血脈を継いだ。御家流を基盤に蜂谷流と米川流も参考とし、大枝流を創始した。また。煎茶・華道を能くし、高遊外・上田秋成らとも交友があった。[主な著作]貝おほいの記（寛延２刊）、香道秋の光附香志（享保 18 刊）、香道千代の秋（享保18 刊）香道滝之糸（享保 19 刊）他。（『国書人名辞典』第一巻、岩波書店、1993 年。）

大枝流芳著享保 18 年（1733 年）出版の『香道秋之光』（国立国会図書館マイクロフィルム版では「香道秋農光附香志」）の書誌は次の通り。18×11cm、上・中・下巻と附録 4 冊。奥書欠。上巻に香道具立物盤の図、中巻に古組十品、下巻に新組十品を収録。

同じく大枝流芳著享保 18 年（1733 年）出版の『香道千代之秋』（国立国会図書館マイクロフィルム版では「香道千代農秋」）の書誌は次の通り。18×11cm、上・中・下 1、2 の計 4 冊。下 2 のみ元文元年刊。出版元は摂陽書房、植村藤三郎他。奥書広告・蔵版目録・近刊予告等あり。上巻に、中古より有来組香目録、香棚飾りの図、香元かざり図、香道具名目、六国之香之事、五味之香、香十徳、香道宗匠、香席法度、香道三十二条目録、名乗紙認やう、組香盤立物之図を解説、中巻・下巻には新組香三十を収める。

組香に関しては、大枝の新作組香が収められたこれら二つの版本のうち、『香道秋之光』には新旧各十組の組香が、また『香道千代之秋』には『香道秋之光』での拾遺として新組香三十が収められている。またそれらのほとんどが盤物であることが特徴的である。

２　『香道蘭之園』における組香の分類

『香道蘭之園』には 210 種の古法の組香が載録されている（附録として新組香が巻末に 26 種収められているがこれを除く）。本論ではまずこれらの組香をテーマ別に分類し、その傾向性をみる。組香の主題として「四季・花鳥風月」、「和歌」、「源氏物語」、「伊勢物語」、「清少納言」、「京都の名所」、「京都の（伝統）行事」、「京都の風習・遊戯」、「祝」、「名所」、そして「その他」の 11 項目に大別する。

分類の一例として「宇治山香」を以下でとりあげてみよう。

組香「宇治山香」（尾崎左永子『香道蘭之園』59、60 頁より抜粋）

一我庵は　二都のたつみ　三しかぞすむ　四世をうぢ山と　五人はいふなり

おのおの一包づゝ、外二試有。
右五包打合、その内一炷きゝ、跡は捨香なり。
一の香ならば我庵、二はみやこのたつみと、香の出やうにしたがひ小記録に書出ス也。
　試の小包の上に歌を書。
　本香の小包は中に歌を書。　おくの折込の所に書也。
　小記録　　都のたつみ　　名

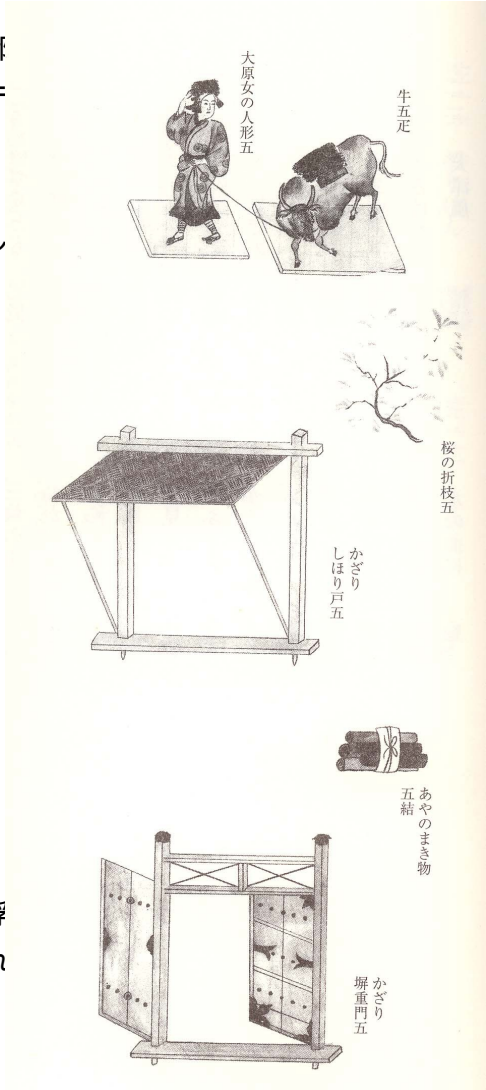
（表１）

解説「我庵は都のたつみしかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」喜撰法師（古今和歌集　雑九八三）にもとづく組香。五種の香を用いる。

この組香では「我庵は」「都のたつみ」「しかぞすむ」「世をうぢ山と」「人はいふなり」という五つの聞きの名目をもつ香をそれぞれ試聞きした上で、一炷聞いてその香の種を当てる。これは喜撰法師の和歌を出典としているので、分類する場合「和歌」の項目か、または「宇治山香」という組香名から「京都の名所」に分別できる。しかし本論の「和歌」のテーマには「小式部香」のような歌詠みや和歌にまつわる逸話を典拠とした組香を入れるので、「宇治山香」は「宇治」という「京都の名所」に分類した。

このように、一つの組香のテーマがいくつかの要素を含む場合に分類は困難であったが、組香名、聞きの名目などから総合的に判断し、210 種の組香の主題を分類した結果が（表１・別表）である。

まず大半を占める主題が「源氏物語」と「四季・花鳥風月」であることがみてとれる。「源氏物語」については『香道蘭之園』全巻のうち第8、9巻が「源氏千種（ちぐさ）香」の掲載で占められている。これは源氏物語五十四帖の「桐壷」「夢浮橋」を除く一帖ずつをその典拠としたものである（異本・重複も含める）。源氏千種（ちぐさ）香は「箒木香」、「空蝉香」に始まり、「浮香」、「蜻蛉香」、「手習香」に終わる。またこれにも前半の巻において源氏物語をベースとした



（図２）
『香道蘭之園御所本』
第六巻「黒木香」人形図

「末広香」（夕顔の巻で、花を末広に載せて差し出すシーンを主題とする）、「舞楽香」（源氏の君と頭中将、青海波を舞う）といったものも含む。

次に「四季・花鳥風月」であるが、草花や鳥の名前、月の名を冠し、また聞きの名目に含む組香は数多い。「秋草香」、「鶯香」、「初雁香」や「水仙香」、「玉椿香」、「新月香」など組香名からそのまま四季を感じとることもでき、内容も各季節に相応しいものとなっている。

三番目の「その他」には、主に「呉越香」や「扇軍香」などの中国の歴史や故事、「手枕香」や「恋路香」等の恋愛に関わるものや、その他少数で分類が困難なものが入っている。

「名所」は京都を除く各所の名所で、歌枕などで使用されているものがそのまま組香になっており、「因幡山香」、「逢坂香」、「松山香」などがあげられる。

「京都の（伝統）行事」には上賀茂神社・競馬（くらべうま）の「競（きそい）香」、七夕行事の「星合香（ほしあいこう）」などが入る。

「和歌」とは先述したように「歌仙香」や「古今香」など、歌詠みや和歌にまつわる組香である。

「京都の名所」は先の各地の名所に入れられていない京都の地名を組み込んだものである先の「宇治山香」、「清水香」、「嵐山香」などがある。

「京都の風習・遊戯」では、下鴨神社その他で現在でも見られる「蹴鞠香」といった貴族の遊戯や、それのみならず市井の風習やあそびも含めてこれらを主題としたもので、大原女の人形を用いた「黒木香」などが含まれる（図２）。

「祝」は「千歳香」や「相生香」といった目出度い席で行われるものである。あとは伊勢物語、清少納言の「枕草子」を出典とする組香がわずかに見られる。

これらを分類しグラフ化すると、とりわけ「四季・花鳥風月」、「源氏物語」という主題が『香道蘭之園』において大きな割合（併せて全体の54％）を占めていることがみてとれる。

３　組香の中の京都–古法の内実として

『香道蘭之園』が「古法」、「古実」の遵守をすすめ、新作組香や流派の新設を固く戒めてことについては既にみた。それではここでいう「古法」、「古実」とは具体的にどのようなものであるか。そしてこれが当時巷に氾濫した組香を精選する際の判断基準となるのなら、その価値観は当時の組香の主題にどのような形で表れているだろうか。

『香道蘭之園』冒頭は「所謂法は十炷香をはじめ数品の古法あり。後世これを好むの士、此法に因襲し、新法を伝会する事至て勝記すべからず。」と述べその後文亀の頃（室町時代）に創作された十炷香は組香の元であり、志野宗信らの時代に組香は 20 余品あったと記している。江戸時代に入り後水尾天皇と東福門院の時代には100 余種に、その後も増えて寛永期には 200 余品もの組香ができたと説明している。したがって、歴史的にみれば鈴鹿周斎の言う「古法」、「古実」の組香は、志野宗信らの組香に始まり、寛永期に集成した200 余種の組香を

[7] 尾崎、2002 年、18 頁。

指していると考えられる。ではこの200余種の組香の特徴はいかなるものであろうか。

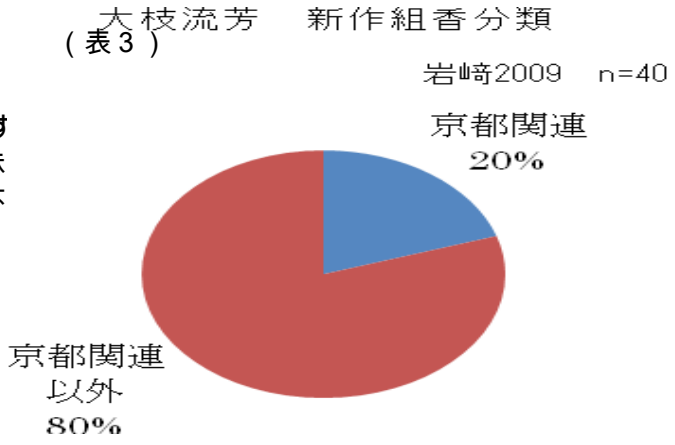
神保博行氏は『香道の歴史事典』の『香道蘭之園』の項目でこの書を貫く美的感性について次のように述べている。「この本も、源泉は京都の公卿社会である。香道は、その発現の当初から京洛の地に舞台を限定していた。ところが堂上から学んだ香を、鈴鹿周斎と衣山靭負が江戸に伝えた…」[8]。香道の発祥の地が京都であり、またその担い手が主に京都の上層階級であったことを考えると、これは当然の言説であろう。また当時は、京都を中心とした後水尾天皇・東福門院の公家文化の雅な世界が花開いた時期でもあった。こうした時期に京都で香道に師事した鈴鹿の組香の選定眼に、京文化が大きな意味を持っていたことは予想に難くない。ではこうした傾向性を実際にはどのように検証できるであろうか。

本論では『香道蘭之園』の組香の分類を行った先のグラフから、京都に関するものとそれ以外に分けてその数を調べてみた（表２）。これをみると『香道蘭之園』の中で京都に関する組香は実に半数近くの44%を占めるということが読み取れる（「和歌」の項目も含めると約半数）。そのうちの大半が源氏物語であり、清少納言や伊勢物語と並んで京都で生まれ、舞台を京都に設定した文学作品が組香の大きな主題となっていることがわかる[9]。また京都の行事や名所も組香で多く扱われている。ただし、行事の内容や名所の選定の仕方はあくまでも皇族・貴族の視点からのもので、蹴鞠、菊合、闘鶏、紅葉狩、そして嵐山、音羽山、石清水といった貴族の遊びや名所に題材をとっている。

（表２）

こうしたことから、巷に氾濫していた組香を精選した鈴鹿周斎の選定基準が、京都を中心とした寛永文化の特徴とよく一致していることが先のグラフで立証できる。したがって、ここから鈴鹿のいう「古法」、「古実」とは、志野宗信やその後の後水尾天皇といった組香の成立時期において香道成立に関わった人・時代の正統性のみならず、香道の発祥の地である「京都」をその基盤としていることが考えられる。実際に鈴鹿は京都から江戸に移住して香道の普及に努めているが、そうした中で京都

（表３）



[8] 神保、2003年、163頁。

[9] しかしながら、源氏物語を主題とす較の対象にもならないという点が興味の世界で遊ぶ組香に適さず、組香に不

という地のもつ文化的豊饒性への高い意識が、組香の選定の際にも働いたと考えられるのである。したがって本書冒頭であげられている「古法」、「古実」には抜き難いものとして「京都」の文化が下敷きにされているとみることができる。

これとは逆に、上方にあって享保期に香の書を多く出版した大枝流芳、またその周囲の人々が作った新組香は全く異なる様相を示している。大枝も当時香道の世界で大きな影響力をもち、その書は香道関係者に広く読まれていた。先述したように、彼やその流派の人々の新組香は相次いで享保 18 年に出版された『香道秋之光』、『香道千代之秋』40 種収められている。これらの新組香 40 種をまとめ、その主題を京都関連か否かで分類したのが（表３）である。京都に関する新組香は、嵯峨野の秋の虫を主題とした「撰蟲香」や宇治を舞台とする「蛍香」などが考案されており、京都関連以外では「花名所香」や「羽衣香」などがある。大枝の書における新組香には、京都へのこだわりが明らかに『香道蘭之園』よりも低いことが読み取れる。大枝の新組香に京都関連の組香が少ないのは、先の『香道蘭之園』が京都に求める正統性の裏返しとも考えられる。大枝は上方で大口含翠に師事し、御家流香道の伝授を受けて奥義を極めたとはいえ、鈴鹿ほどには「古法」、「古実」に拘泥することなく、新たな組香を次々と生み出していった。鈴鹿の遺志を継いだ菊岡が、「印本の異説」と批難したと思われる大枝の組香を、「京都」という視点から比較すると、組香における両者の京文化に対する意識の違いが鮮明になる。

４　盤物について–視覚と想像

（図３）子の日香盤小松引

寛永文化の影響を受けつつ香道に師事した鈴鹿にとって、組香で表現されるべき情景は京都の公家文化であった。しかしこれは特に香道に限られたことではなく、茶道にせよ、華道にせよ、その権威を京都の上層階級やその文化に借りるということは往々にしてある。そこで次に組香が京都の情景を表現する際の独特なあり方について指摘したい。

（図４）四種盤（矢数香、名所香、源平香、競馬香）

組香の中に「盤物」と呼ばれる盤の上で人形などを動かして点数を競う形式がある（図３-５）。代表的な盤物の組香として、（図４）の四種盤に含まれる競馬香（競香とも言われる）をみてみよう。図のように赤と黒の装束を着た馬上人形を、各々香が当たれば前に進め、楓の木のところで勝敗を決する。『香道蘭之園』にはこうしたいくつかの盤物が収録されている。また『香道秋之光』や『香道千代之秋』における新作組香の多くは盤物であり、盤や立物についての詳細な図が載せられている（一例として図６）。『香道秋之光』で大枝は、京都で香道具を制作する店の紹介までしている[10]。しかしこ

（図６）『香道秋の光』上巻「花軍香」立物図

[10]　『香道秋之光』上巻末尾に「香道具細工所」として下記の京都の店が掲載されている。

うした盤物は現在ではほとんどみられず、今日確認することのできない稀少な存在であるとされる[11]。

盤物の役割は何か。大方の盤なしの組香では、各人が文学や名所という世界を共有しつつも、その具体的なイメージは各々の想像力に任されている。しかし主題の場合によっては、盤物は組香の情景を鮮明にし、イメージの世界を共有しやすくする装置となるのではないだろうか。

それでは（表４）どのような主題が盤物に多いだろうか。『香道蘭之園』における盤物の割合とそのみてみよう内訳をみてみよう（表４）。盤物は全体の４分の１の割合を占める。このうち眼を引くのは「その他」と「源氏物語」「京都の（伝統）行事」の盤物が多いことである。しかし（表４）は示していないが、もともと組香の数が多い源氏物語の中だけでみれば、盤物の割合は実は低い（源氏物語に関する組香全体の中の21.3％）。逆に数の上では「源氏物語」に劣るとはいえ、「京都の行事」と「京都の風習・遊戯」は併せて半数近くが（47.3％）盤物として視覚化されている。

この両者は対照的な数字であり、盤物の特徴を考える上で示唆的である。つまりここから源氏物語などの文学性の高い主題をもつ組香はその舞台が京都であっても香席で共有される情景を参会者の想像力に委ねており、逆に京都の伝統行事などは大いに視覚化することによってその華やかさや王朝の雅を目で楽しんだということがいえるのである。

京寺町通姉小路西南角　香道具人形盤類　梅本薩摩
京東洞院四条上ル二丁目西側　金物細工人　野村藤右衛門
京寺町通竹屋町下ル町東側　木細工　唐木屋勘兵衛
京大宮西へ入ル神明町　金物細工人　鋲屋四郎兵衛
京押小路通間之町東へ入南側　人形細工人　桔梗屋庄左衛門
京河原町姉小路西南角　人形細工人　人形屋幸助

これらの職人たちがどのような形で様々な意匠の香道具を請け負ったかという実態は不明であるが、当時は金物細工、木細工、また人形細工に携わる者たちによってかの精巧な盤物も制作されていたことが推測される。

[11]尾崎、2002 年、10 頁。

同様の傾向は大枝の香書についても指摘できる。大枝の『香道秋之光』、『香道千代之秋』に収録された新組香計 40 種の中では、先に（表３）で述べたように京都関連の組香は 20％（総数 40 に対して 8 種）であるが、その中で盤物となっているものは 88％（京都関連の 8 種に対して 7 種）で、ほとんどが盤物として視覚化されていることがわかる。もともと大枝の新組香における盤物の割合が半数以上の 58％（総数 40 に対して 23 種）であるのに、その中でも特に京都関連になると飛躍的に盤物になっている割合が高い。逆にどのようなものが盤物ではないかといえば、「富士香」や「初雪香」、「匂集香」など、そこに何らかの傾向性を見出すのは困難であった。こうしたことから、大枝は京都の古実・古法に縛られずに自由に組香を制作したが、それでも京都関連の組香に関しては、明確な視覚化への意図があったと考えられる。また、もともと大枝の香書に盤物への志向が強いことの原因として、彼が貝合に凝っており、その延長線上でミニチュアの細工ものを盤上で並べ動かすことに楽しみを見いだした可能性が指摘されている[12]。

こうしたことから、『香道蘭之園』での組香の中の情景は、時にこうしたミニチュアを使ったいわば「京都疑似体験」として目を楽しませ、逆に源氏物語などの場合には光源氏といった登場人物の様相や物語の情景について参会者各人の想像力に任されるといった具合に、テーマによって盤物が巧妙に使い分けられていたことがうかがえるのである。

５　結びにかえて

『香道蘭之園』の組香の主題を分類・分析することにより、当時の組香の選定基準に寛永文化の色濃い影響がみてとれた。上方から江戸にわたった鈴鹿周斎のまとめた『香道蘭之園』の組香の主題は、「古実」、「古法」としての京都を中心とする公家文化であり、したがって組香で共有される情景も京都に何らかのかたちで関わるものが多いことがグラフから読み取れた。ところが同時代の上方にあった香人・大枝流芳の新作組香はこうした傾向とは逆に、特に京都を主題にするということはなく「古実」、「古法」にこだわらずに新流派をなしていた。こうした事象は香道の上方から江戸への普及に際して、京都の文化が正統性の基盤として機能していたことを推測させる。また組香の盤物は、香席で共有されるイメージの視覚化として機能する。統計によれば盤物は京都の伝統行事など視覚的に楽しめるものに多く、逆に物語などの情景を構成するのは参会者の想像力に委ねられていたことが明らかになった。

今後の課題として、上方から江戸への香道の普及期に伝わった『香道蘭之園』以降の、堂上から地下への香道の浸透について検証を続けたい。

12　翠川文子「大枝流芳（岩田信安）小考」、川村学園女子大学研究紀要、第 15 巻第 2 号、2004 年。

●図版出典

図 1　　尾崎左永子『香道蘭之園』1 頁より転写

図 2　　尾崎左永子『香道蘭之園』245 頁より転写

図 3　　畑正高監修『香が語る日本の文化史・香千載』54 頁より転写

図 4　　『香道入門』、淡交社、1993 年、38 頁より転写

図 5　　神保博行『香道の歴史事典』図版 9 頁より転写

図 6　　大枝流芳『香道秋の光』、国立国会図書館複写資料Y(D-古-4491 マイクロフィルム）より転写

●参考文献

・『香道蘭の園』、国立国会図書館複写資料
（YD-古-3738(第 1 冊) ; YD-古-4537(第 2～7 冊) (マイクロフィルム)

・大枝流芳『香道千代の秋』、国立国会図書館複写資料
（YD-古-4491）(マイクロフィルム)

・大枝流芳『香道秋の光』、国立国会図書館複写資料
（YD-古-4491 ）　(マイクロフィルム）

・『香道蘭之園』、尾崎左永子、淡交社、2002 年

・『香道の作法と組香』、香道文化研究会編、雄山閣、2000 年

・『香が語る日本の文化史・香千載』、畑正高監修、光村推古書院、2001 年

・『香道の歴史事典』、神保博行、柏書房、2003 年

・『香道具　典雅と精緻』、荒川浩和、淡交社、2005 年

< 別表 >『香道蘭之園』組香主題一覧（※著作掲載順に分類）

番号	組香	巻数	主題	盤物
1	十炷香	第二巻	その他	
2	無試十炷香		その他	
3	炷合十炷香		その他	
4	花月香		四季・花鳥風月	
5	二炷開華月香		四季・花鳥風月	
6	競香		京都の（伝統）行事	●
7	祝香		祝	
8	源氏四節香		源氏物語	
9	清氏四節香		清少納言	
10	千とせ香		祝	
11	宇治山香		京都の名所	
12	水草香（盤なし）		四季・花鳥風月	
13	水草香（盤物）		四季・花鳥風月	●
14	小草香		四季・花鳥風月	
15	小鳥香		四季・花鳥風月	
16	草木香		四季・花鳥風月	
17	若浦香		名所	
18	船路香		その他	●
19	御祓香		その他	
20	名所香		名所	●
21	住吉香		名所	
22	玉津嶋香		名所	
23	人麿香		和歌	
24	源氏香		源氏物語	
25	鴛鴦香		四季・花鳥風月	
26	矢数香		京都の（伝統）行事	●
27	難波香		名所	●
28	三が一香		その他	
29	秋草香		四季・花鳥風月	
30	初春香	第三巻	四季・花鳥風月	

31	手枕香		その他	
32	呉越香		その他	●
33	四季香		四季・花鳥風月	
34	山吹香		四季・花鳥風月	
35	松梅香		四季・花鳥風月	
36	末広香		源氏物語	
37	松山香		名所	
38	因幡山香		名所	
39	鵜船香		京都の風習・遊戯	●
40	玉椿香		四季・花鳥風月	
41	水仙香		四季・花鳥風月	
42	蹴鞠香		京都の風習・遊戯	●
43	雁金香		四季・花鳥風月	
44	十二支香		その他	
45	菊合香		京都の（伝統）行事	●
46	新月香		四季・花鳥風月	
47	衣手香		京都の風習・遊戯	
48	野飼香		四季・花鳥風月	●
49	三鳥香		和歌	
50	風音香		四季・花鳥風月	
51	相生香	第四巻	祝	
52	黄鸝香		四季・花鳥風月	
53	三光香		四季・花鳥風月	
54	三輪香		名所	
55	扇軍香		その他	●
56	五色香		和歌	
57	摘草香		京都の名所	
58	草苅香		四季・花鳥風月	●
59	美人香		源氏物語	
60	比翼香		その他	
61	紅葉狩香		京都の（伝統）行事	
62	清水香		京都の名所	
63	花筏香		四季・花鳥風月	●

64	貝合香		京都の風習・遊戯	
65	東路香		伊勢物語	
66	井筒香		伊勢物語	●
67	水鳥香		四季・花鳥風月	
68	八卦香		京都の名所	
69	詩歌香		その他	
70	山路香		名所	
71	舞楽香		源氏物語	●
72	小式部香		和歌	
73	三景香		名所	
74	催馬楽香（盤なし）		源氏物語	
75	催馬楽香（盤物）		源氏物語	●
76	源氏四町香		源氏物語	
77	風香		四季・花鳥風月	
78	老松香	第五巻	四季・花鳥風月	
79	桂香		名所	
80	牡丹競香		四季・花鳥風月	●
81	菓香		四季・花鳥風月	
82	何鳥香		四季・花鳥風月	
83	三夕香		和歌	
84	文字合香		京都の風習・遊戯	
85	六歌仙香		和歌	
86	雛鶴香		祝	●
87	七草香		四季・花鳥風月	
88	逢坂香		名所	
89	宇津山香		名所	
90	花蝶香		四季・花鳥風月	●
91	芥川香		伊勢物語	
92	雨中香		四季・花鳥風月	
93	六儀香		その他	●
94	橘香		四季・花鳥風月	
95	八景香		名所	
96	明暮香		四季・花鳥風月	
97	陰陽香		その他	
98	初雁香		四季・花鳥風月	●

99	蛍香		京都の名所	
100	古今集香		和歌	
101	顔よ花香		伊勢物語	
102	早苗香		四季・花鳥風月	●
103	鳥合香		和歌	
104	恋路香		その他	
105	歌合香	第六巻	和歌	
106	東山殿流星合香（盤なし）		京都の（伝統）行事	
107	東山殿流星合香（盤物）		京都の（伝統）行事	●
108	星合香（志野流）		京都の（伝統）行事	
109	星合香（相阿弥流）		京都の（伝統）行事	
110	古今香		和歌	
111	みちのく香（盤なし）		名所	
112	みちのく香（盤物）		名所	●
113	郭公香		四季・花鳥風月	
114	自香の郭公香		四季・花鳥風月	
115	弥生香		名所	●
116	雌雄香		四季・花鳥風月	
117	系図香		源氏物語	
118	三種香		源氏物語	
119	虫撰香		四季・花鳥風月	
120	桜狩香		京都の名所	
121	陽炎香		四季・花鳥風月	
122	籏香		その他	●
123	源平香		その他	●
124	神路香		その他	
125	石清水香		京都の名所	
126	三笠山香		名所	
127	鷹狩香		四季・花鳥風月	●
128	藤浪香		名所	
129	衣更着香		四季・花鳥風月	

130	衞香		四季・花鳥風月	
131	黒木香		京都の風習・遊戯	●
132	歌仙香		和歌	
133	子日香	第七巻	京都の（伝統）行事	
134	玉川香		名所	
135	錦木香		その他	
136	木樵香		その他	●
137	浦路香		名所	
138	葛葉香		四季・花鳥風月	
139	闘鶏香		京都の（伝統）行事	●
140	皐月香		四季・花鳥風月	
141	初音香		四季・花鳥風月	●
142	追儺香		京都の（伝統）行事	
143	川浪香		四季・花鳥風月	
144	武蔵野香		名所	
145	鸚鵡香		四季・花鳥風月	
146	嵐山香		京都の名所	
147	雪香		四季・花鳥風月	
148	石橋香		その他	●
149	三文字香		その他	
150	煙競香		その他	
151	みあれ香		京都の（伝統）行事	
152	葵香		四季・花鳥風月	
153	曙香		清少納言	
154	馬競香		京都の（伝統）行事	●
155	連理香		その他	
156	名香合		その他	
157	名香合		その他	
158	箒木香	第八巻	源氏物語	
159	空蝉香		源氏物語	●

160	夕顔香		源氏物語	
161	若紫香		源氏物語	
162	末摘花香		源氏物語	
163	紅葉賀香		源氏物語	
164	花宴香		源氏物語	
165	葵香		源氏物語	●
166	賢木香		源氏物語	
167	花散里香		源氏物語	
168	須磨香		源氏物語	
169	明石香		源氏物語	
170	澪標香		源氏物語	●
171	関屋香（盤なし）		源氏物語	
172	関屋香（盤物）		源氏物語	●
173	蓬生香		源氏物語	
174	絵合香		源氏物語	●
175	松風香		源氏物語	
176	薄雲香		源氏物語	
177	朝顔香		源氏物語	
178	乙女香		源氏物語	●
179	玉葛香		源氏物語	
180	初音香		源氏物語	
181	胡蝶香		源氏物語	●
182	蛍香		源氏物語	
183	常夏香		源氏物語	
184	篝火香		源氏物語	
185	野分香		源氏物語	
186	御幸香	第九巻	源氏物語	●
187	ふぢばかま香		源氏物語	
188	巻柱香		源氏物語	
189	梅枝香		源氏物語	●
190	藤裏葉香		源氏物語	
191	若菜香（上）		源氏物語	●
192	若菜香（下）		源氏物語	●
193	柏木香		源氏物語	
194	横笛香		源氏物語	

195	鈴虫香		源氏物語	
196	夕霧香		源氏物語	
197	御法香		源氏物語	
198	幻香		源氏物語	
199	匂宮香		源氏物語	
200	竹川香		源氏物語	
201	紅梅香		源氏物語	
202	橋姫香		源氏物語	●
203	椎本香		源氏物語	
204	総角香		源氏物語	
205	早蕨香		源氏物語	
206	寄生香		源氏物語	
207	東屋香		源氏物語	
208	浮舟香		源氏物語	
209	蜻蛉香		源氏物語	
210	手習香		源氏物語	